

Weekly Survey

17日未明多国籍軍がイラク軍事施設への空爆を敢行、ついに湾岸戦争は始まった。対するイラクはかねて予告のとおりイスラエルにスカッド・ミサイルを打ち込み、イスラエルも報復攻撃を宣言。昨年8月始まった湾岸危機は中東全域を巻き込む全面戦争の様相に。

中嶋嶺雄

ついに戦争が始まった

ついに米国のイラク武力攻撃が1月17日午前3時(現地時間)を期して断行された。それがいかにぎりぎりの選択であったかは、軍事行動開始後のブッシュ米大統領によるテレビ放送でも確認されたが、事態が今後どのように展開してゆくのか、まだ予断は許されない。

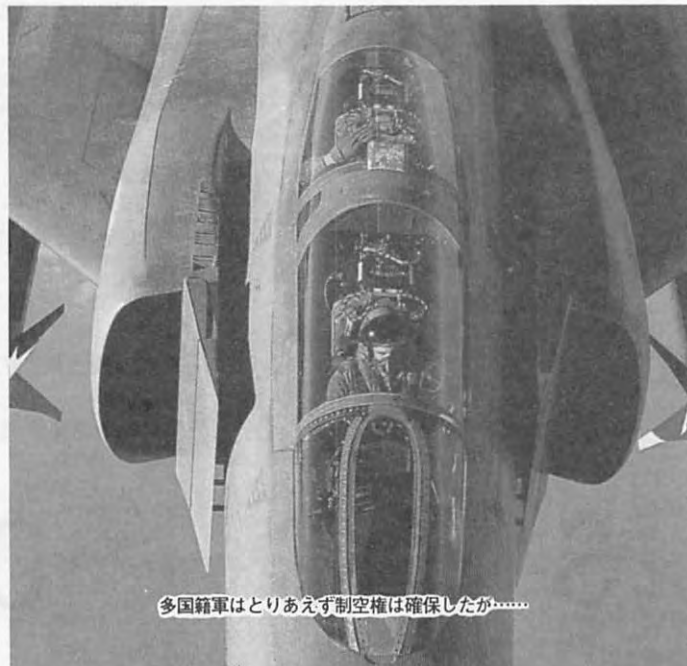
国連安保理決議の期限1月15日に読まれることになる今週のTIMEの表紙は、GULF SPECIAL JANUARY 15: DEADLINE FOR WAR、湾岸危機全面特集になっている。カバーストーリーのトップの“The Moment of Truth”(pp. 8-11)は、「偶発ではないので、戦争が始まれば、双方は十分な準備の下に戦うだろう」との展望で、サダム・フセイン大統領とブッシュ大統領の立場を改めて紹介しているが、それにしても、1月17日、多国籍軍による数波のイラク空爆の結果は、米軍を中心とする多国籍軍の緒戦における計画どおりの圧倒的勝利という戦況であって、イラク側とのその著しい非対称性(Asymmetry)は予想以上のものであった。“Saddam's Options”(pp. 12-15)と題した記事は、「彼は欧米人のように考えないから、どのような選択をするのか、だれにもわからない」との前提で、撤兵(全面的撤兵、部分的撤兵、段階的撤兵)から熟慮された戦争(防衛戦、イスラエル攻撃・サウジアラビアの石油施設攻撃・テロリズムを含む攻撃戦)まで、さまざまな可能性をチャートで示しているが、多国籍軍は、こうしたイラク側の戦略を読んだ上で、イラクが主張してきたイスラエル攻撃の能力を緒戦でかなり撃破したと思われる。

“Last Gasp on the Negotiation Trail”(pp. 16-17)は、戦争回避に努力しようとしたデクエヤル国連事務

総長、ミッテラン仏大統領らの役割を解説しているが、まさに「最後のあがき」もむなしく途絶えたのである。

湾岸問題の本質に注目の必要

それにしても、今回の戦争勃発を見て思うことは、米国側の強い決断と行動力であるが、緒戦の圧勝にもかかわらず、その将来はまだ読めないように思う。イラクのクウェート侵略は暴挙であるにしても、そのようななきばをむき出していたイラクの侵略を容易に許したクウェートにも問題があったのではないかと。クウェートは軍事的にも外交的にも、イラクの侵略を防ぐ努力を怠ってきたから、このような暴挙を許したのではないかと。米国がそのクウェートの側に立って局地紛争を全世界的な問題に転じ、その上イラク全面攻撃に出たのは、いかに米国的正義や新しい世界秩序のためとはいえ、やはり問題が残りはしないだろうか。当面



多国籍軍はとりえず制空権は確保したが……



リトアニア独立を阻止すべくソ連軍が軍事介入

の「戦争ゲーム」に世界が幻惑されて、問題の本質についての論議が少ないように思われてならない。

ジャーナリストの気概

“From the Publisher” (p. 1) の欄では、湾岸での戦争に備え *TIME* の報道態勢は万全であると述べられている。今回の戦争開始に際しても、ホワイトハウスの発表よりも早く、CNN や ABC などの 3 大ネットワークのバグダッド駐在記者が多国籍軍による空爆開始を生々しく伝えていることも含め、アメリカジャーナリズムの気概がこの小さなコラムからも感じられる。中東の特派員団長ジョン・スタックスの今回の紛争は米国が経験した他の戦争と比べ「奇妙」で「神経を疲弊させる」ものだ、というコメントも、紛争を直接現地で見聞きしている者の言葉として非常に現実味がある。

ベトナム戦争がまだ継続中であった1969年、ビートルズのジョン・レノンは「平和を我等に(Give Peace a Chance)」とコンサートで歌った。彼とオノ・ヨーコとの間に生まれたひとり息子ショーンは、湾岸危機をテーマに父のこの歌に新しい歌詞をつけてビデオを制作したという (People [p. 52])。ついに戦争が始まってしまったが、世界の多くの人々は心から「平和を我等に」という思いで戦闘の経緯を見守っているのであろう。

バルト情勢も緊迫化

去る1月12日以来、ソ連邦バルト三国のひとつ、リトアニア共和国で起こっている事態も深刻である。1年前にリトアニア独立への動きが活発化した時には、脱冷戦による米ソ協調体制をつくり上げたマルタ会談(1989年12月)直後であっただけに、米国側の態度も慎重であったが、今回のソビエト軍の出動に関して

は、米国の世論もきわめて厳しい。今回の“The Iron Fist”(鉄のゲンコツ) [pp. 30-32] にゴルバチョフ大統領が関与していなかったらしいことは、ひとつの救いであろうが、しかし、だとすればソ連の政治・軍事情勢はきわめて深刻だろうと言わざるを得ない。

何のためのスポーツか

今週の Sport 欄では、年々深刻化している、スポーツ選手の薬物投与の問題を取り上げている。

ソウル五輪での陸上競技100メートル金メダル取り消し事件以来、2年間の出場停止処分を受けていたベン・ジョンソンが、先ごろカナダで行われた大会でレースに復帰した。しかし、あのスキャンダルから2年を経た現在、薬物を使用している選手の数には増加する一方だという。

薬物投与に対する通年の抜き打ち検査など、さまざまな努力がなされ、ある程度の成果は得られているものの、その加速を抑えるのが精一杯という現状であるようだ。

薬物投与に伴って心臓・肝臓系の疾患が発生することは早くから知られていたが、近年では副作用としての精神障害の例も報告されており、新たな警告が発せられている。

Sport というのは本来、des- (離れる) + porter (運ぶ、仕事をする)、つまり、「仕事をやめて楽しむ」という意味なのである。スポーツ選手たちだけでなく、わたしたちも、あまりにも過熱している今日の時代のスポーツの意義を考え直してみるべき時期にきているのではないだろうか。

(なかじま みねお/東京外国語大学教授)